

4.

【 古代鉄 私考 古墳時代の幕開け 】

一筋縄ではいかぬ古墳時代の幕開け 激動の時代 淡路島がその鍵を握るのか ???

淡路島で発掘された卑弥呼の時代の日本最大級の鍛冶工房村の位置付けに思いをめぐらす



淡路島は北九州・瀬戸内と大和を結ぶ「鉄の道」の中継点か?
 弥生時代中期、朝鮮半島から九州北部を経て、日本海、瀬戸内海沿いなど複数
 ルートで東へと続く「鉄の道」 よくわからぬ実態が解けるかも・・・



1月23日 新聞紙上で「卑弥呼の時代の国内最大級の鍛冶工房村が淡路島北部で出土」と報じられ、卑弥呼の鍛冶工房村か はたまた、この鍛冶工房が古墳時代幕開け 大和倭国連合による日本統一のさきがけか・・・

と古代の夢を膨らませませ、1月25日 発掘調査された淡路市の垣内遺跡現地説明会にも参加し、10棟を超える鍛冶工房の出土にびっくり。また、神話の島 淡路島での出土に 古代のロマンをあれやこれや膨らませました。

まだ、詳細な調査報告もでていませんし、この鍛冶工房村の性格や位置づけはこれから…………。



【和鉄の道 Iron Road】 <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/9iron02.pdf>

弥生時代後半 国内最大級の鍛冶の村「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会 Walk
 国生み神話の淡路島で、弥生時代後半 卑弥呼の時代の大鍛冶工房村が出土した

でも まだ、鉄がさほど畿内に持ち込まれていないと考えられていた時代に びっくりする大きな鍛冶工房村が淡路にあった。古墳時代の幕開けを演出した鍛冶工房村ではないか……と勝手に思い込み、あれこれ思いをめぐらせるのですが、でも どうも 腑に落ちない。

本当に 古墳時代・大和王権へと繋がってゆく鍛冶工房村だったら、古墳時代 大きな前方後円墳が築かれても不思議でないが、前方後円墳もこの時代に始まる大型墳墓も出土していない。

また、淡路島は後に「御食国」と重要視されながらも、戦国時代に至るまで、阿波国の一部と見られてきた。

本当のところ 淡路島の位置づけはどのようなだろうか…………。

色々資料に当たると知らぬことばかり。卑弥呼の時代から古墳時代への過渡期 東瀬戸内地域の諸国と大和との関係は一筋縄ではいかぬ。特に 西から瀬戸内を經由して大和・河内へいたる道の入り口にある淡路・摂津西部は特異な様相を示している。まだ 妄想・空想の段階ですが、淡路に出土した大鍛冶工房跡ならびにこの時代の周辺諸国の動きを「キーワード」に古墳時代前夜の淡路島についてイメージを膨らませました

播磨・吉備・讃岐・阿波・河内・大和など周辺地域諸国が交流する中、他の地域の土器が入らぬ特異的な地域 淡路島と明石海峡を挟む摂津西部。また、播磨風土記には 播磨における渡来製鉄集団の争い・技術集団の入替りなどの記述が数多く記載されている摂津西部・淡路縞北部の特異的な高地性集落の急速展開と消滅

弥生の後半 卑弥呼の時代 淡路島は周辺諸国にくみしない独自の地域集団か……

そんな集団が明石海峡を挟む北淡路と摂津西部の集団が西から大和への通商の道を阻んでいたのではないかと……

そんな独自集団の鍛冶工房が垣内遺跡か……

この鍛冶工房村と時を同じくして この地域に数多くの高地性集落が出現し、古墳時代の幕開けには共に消滅する。淡路で出土した国内最大級の鍛冶工房村はこれら淡路の高地性集落群と共に命運を共にしたのではないかと……

この地域が大和の連合に組み込まれることにより、西から大和への陸路 鉄の道は安定化

製鉄鍛冶技術も大陸・朝鮮半島の最新技術が大和へ持ち込まれるようになり、本格的鍛冶(高温鍛冶)が始まり、大規模古墳群を築く古墳時代の幕開けをもたらしたのでは……

出雲神話と同じく淡路島の国生み神話もそんな名残でないだろうか……

妄想かもしれませんが、ひとり そんな思いをめぐらせています。

妄想かもしれませんが、大量の強い鉄器生産なくては築けなかった大規模古墳群

朝鮮半島・大陸からの「鉄素材」の入手経路の安定確保が倭国連合の生命線だった激動の2・3世紀

轡を伴う高温鍛冶による強い実用鉄器製造が始まる前夜 ベールに包まれた古墳時代幕開けへの激動の時代

瀬戸内・畿内でも「鉄」をめぐる連合・離反の争いがくりひろげられたのではないかと……

2009.03.15. by Mutsu Nakanishi

1月23日 新聞紙上で「卑弥呼の時代の国内最大級の鍛冶工房村が淡路島北部で出土」と報じられ、卑弥呼の鍛冶工房村か はたまた、この鍛冶工房が古墳時代幕開け 大和倭国連合による日本統一のさきがけか……。

古代の夢を膨らませませ、1月25日 発掘調査された淡路市の垣内遺跡現地説明会にも参加し、10棟を超える鍛冶工房の出土にびっくり。また、神話の島 淡路島での出土に 古代のロマンをあれやこれや膨らませています。鉄がさほど畿内に持ち込まれていないと考えられていた時代に びっくりする大きな鍛冶工房村が淡路にあった。また、詳細な調査報告もでていないし、この鍛冶工房村の性格や位置づけはこれから……。



古墳時代の幕開けを演出した鍛冶工房村ではないかと……と勝手に思い込み、あれこれ思いをめぐらせるのですが、でも どうも 腑に落ちない。本当のところこの時代 淡路島の位置づけはどのなのだろうか????。

古墳時代・大和王権へと繋がってゆく鍛冶工房村だったら、古墳時代 この淡路に大きな前方後円墳が築かれても不思議でないと思うのですが、前方後円墳もこの時代に始まる大型墳墓も淡路島では見つかっていない。また、淡路島は後の時代に「御食国」と重要視されながらも、戦国時代に至るまで、阿波国の一部と見られてきた。

出土した国内最大級の鍛冶工房村 垣内遺跡からは 家島群島・男鹿島が見える瀬戸内・播磨灘 そしてそのすぐ横に播磨の海岸線が手に取るような近さである。この時代、大和を中心に西国の諸国が倭連合を作り、それが軸となって、大和王権成立へ向けての黎明の時代。

大和巻向に邪馬台国があったかどうかは別にして、大和には大きな勢力があり、大和・河内と密接な関係を持っていたといわれる阿波・吉備・讃岐・播磨の諸国 そして淡路島の人々の動きは どうだったのか……

特に 淡路島 北部からは すぐ先に見える播磨との関係はどうだったのだろうか……

不思議に思っ、以前 話を聞いたふたかみ邪馬台国シンポジウム 6 資料集「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」(香芝市教育委員会・香芝二上山博物館)や シンポ資料「『倭国』連合の成立と姫路地域の役割」(2008.3.22 兵庫県立考古博物館 姫路埋蔵文化センター)を引っ張り出して 資料を読み出して 淡路島の特異な動きを発見してビックリ。

卑弥呼の時代から古墳時代への過渡期 東瀬戸内地域の諸国と大和との関係は一筋縄ではいかぬ。

特に 西から瀬戸内を経由して大和・河内へいたる道の入り口にある淡路・摂津西部は特異な様相を示しているという。

この古墳時代前夜の黎明の時代 他所から移入する土器を手がかりに周辺諸国との交流を観ると、

淡路島 そして、対岸の摂津再西部では、

周辺諸国が活発な交流をしているのにもかかわらず、ほとんど交流がみられが、独自路線。

そして、縄文晩期 古墳時代の幕開けの尺度 庄内式土器・布留式土器の流入が周辺諸国に比べもっとも遅いという。

ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6 資料集「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」

シンポ資料「『倭国』連合の成立と姫路地域の役割」(2008.3.22) より

いろんな伝承があり、周辺諸国は活発な交流をしているのに、ちょうど その真っ只中で 淡路島は沈黙し、独自の路線を黙々と進む。周辺諸国には競って、庄内式土器・布留式どきがいいるのに??????

なんとも 不思議である。淡路で何がおこっているのだろうか……

上記 ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」の資料の中で、弥生時代の遺跡発掘に詳しい森岡秀人氏(芦屋市教育委員会)はこの時代の「淡路島」について、次のように指摘している。

東瀬戸内地域を今回論議されるテーマに則して限定すれば、阿波・讃岐・播磨ということになろうが、東瀬戸内地域の範疇に加えておきたい地域が淡路や摂津西部であり、これらと関連する播磨東部も同西部地域とは異なった意味で検討を要する地域である。

私はこの二つの地域の邪馬台国の時代の動態にも注意を払ってきたし、東瀬戸内では幾分変わった動きを示す地域として看過できないと考えている。 ………

淡路は従来該期の古墳や墳丘墓が少ない上、上記したメインの三地域との交流が乏しい地域と考えられてきたため、基礎的検討が敬遠され、その評価が著しく低かったが、一定の地域性が認められる点において島内でクニの萌芽を考えてみる必要があるだろう。2～3 世紀にどのような役割を果たしたか検討すべきではなからうか。

律令期、淡路は天皇に食料を貢納する「御食国」とされ、中央政権と直結する役割をはたす。摂津西部は中河内に地域に近い地域ながら、庄内式併行期の土器相はかなり異なっており、……… 様相は複雑である。

結論を急ぐ必要はさらさらないが、………

ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6

「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」資料 森岡秀人「東部瀬戸内と大和」より

この時代の淡路には何かある。

先に淡路島で出土した国内最大級の鍛冶工房村についても、この時代の淡路島の特異な状況を踏まえて考えねばならない。

以下、上記した資料に掲載されていた周辺諸国の動きのベース資料を抜粋すると共に、この時代の淡路や周辺諸国の製鉄技術関連の動きについて、気になることを書き出してみました。

1. 北播磨は山陰・中国山地と続く古い製鉄地帯 弥生の鉄の大集積地

北九州⇒出雲⇒麦木晩田⇒青谷上寺地 吉備・播磨と続く「鉄の道」が見えている。

そして、すぐ対岸の東播磨の海岸線 加古川河口の右岸近くには 強力な鉄器工具を多数用いなければ、到底作ることが出来ない謎の古代石造物「石の宝殿」があり、出雲の神を祭り、また、時代は下るが、播磨風土記には物部氏との関係が記されている。

2. 淡路には「国生み神話」があり、淡路島の南の端 由良の紀淡海峡を望む岬の突端に新羅神社がある。

そのルーツは良く調べていないが、淡路の鉄を調べる手がかりになるかもしれないと記憶にある。

3. 畿内周辺の製鉄技術を考えてみる。

時代は下るが播磨風土記には北播磨を中心に数々の製鉄伝承がある。

製鉄技術黎明の時代に 朝鮮半島渡来神や日本海沿岸諸国からの鍛冶技術の導入など播磨における製鉄技術伝承が数々記載されており、北播磨を舞台に数々の新しい製鉄技術が持ち込まれ、鉄づくりが行われるとともに、技術抗争も生んだことが記載されている。

4. 一方 淡路島では、この垣内鍛冶工房遺跡とともに周辺には数多くの高地性集落が現れ、共に消えていくという特異な事実が見つかっている。

同じような独自地域集団がいたとみられる淡路島対岸の摂津西部地域 播磨との境 六甲山系の山々が海峡に落ちる西側の丘陵地の山裾 明石平野には数多くの高地性集落が現れ、そして それらが消えていくと共に 淡路島とは対称的に数々の古墳群が現れ、西日本諸国と大和をつなぐ重要地点であったことを示している。

これらをかながえあわせると

淡路島と周辺地域の動きを考えると淡路島・明石海峡と西六甲須磨の山々が大和と西日本諸国をつなぐ道の壁となって立ちはだかり(この地の勢力なのか 自然的な地形なのか その両方なのか 良くわからないが・・・)、この地が倭国連合の中に組み込まれることにより、大きく古墳時代への幕開けへと動いたのではないかと・・・

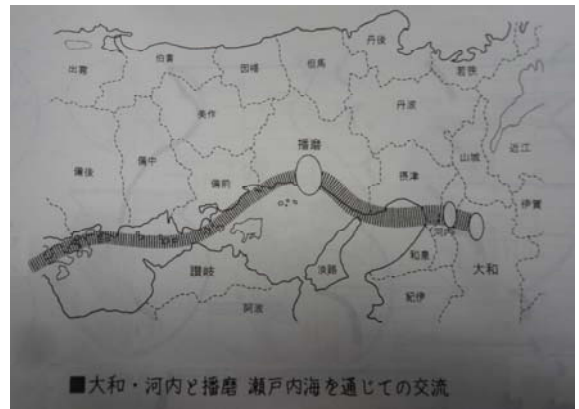
この前提には 摂津・播磨の国境地帯がこの時代 陸路も海路も非常に不安定で、大和と西国諸国を安定につなぐ道の確保が朝鮮半島の「鉄素材」の確保と共に大きな課題だったと考えねばならないが・・・。

後の須磨の関である。

特にこの道を通っても垂らされる大陸・朝鮮半島の最新先端技術の優劣が直ぐに諸国の力に結びついていたのではないかと・・・

まさに 鉄の道の攻防戦が この播磨・摂津西部・淡路・阿波の瀬戸内東端で繰り広げられたのではないかと・・・

この時代を経て、大和を軸とした国づくりが始まったのではないかと・・・



大和・河内と播磨 瀬戸内海を通じての交流

まだ、本当に妄想にすぎませんが、空想とは言い切れない。

そんなイメージを抱き始めています。

卑弥呼の時代から古墳時代への過渡期 東瀬戸内地域の諸国と大和との関係は一筋縄ではいかぬ。

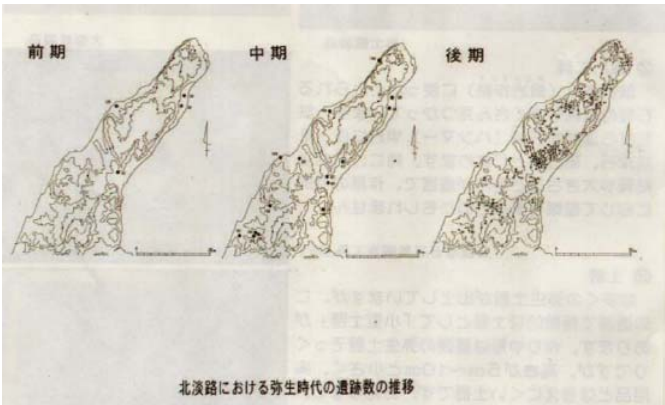
特に 西から瀬戸内を経由して大和・河内へいたる道の入り口にある淡路・摂津西部は特異な様相を示している。

このことが、同時に西国から紀ノ川や熊野・吉野の日本神話のルートにも大きな影響をあたえたのでは・・・

卑弥呼の邪馬台国の九州・大和論争と同時に もうひとつ 畿内には「淡路島」の位置づけを解かないと古墳時代の幕開けが見えないのではないかと・・・と問い始めています。

調査資料 古墳時代幕開けの前夜 淡路島周辺諸国の動きが面白い

1. 北淡路における弥生時代の遺跡数の推移



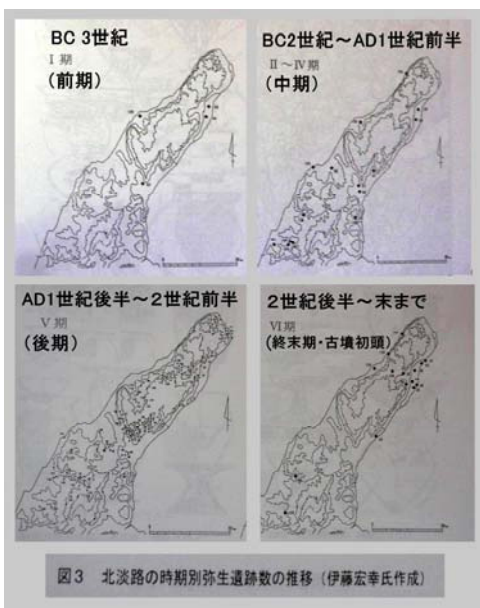
鍛冶工房村垣内遺跡が営まれる弥生時代後期、周辺の丘陵地に数多くの高地性集落が急増。鍛冶工房が消える終末期 同じように北淡路の丘陵地の集落も消える。

わずかに製塩の集落が海岸部に出てくる。

遺跡が継続的に営まれず、淡路がこの時期 大きな変革の渦に巻き込まれたと考えられる。

● 3世紀前後の淡路島における地域相

的崎薫 「邪馬台国時代の淡路島」より

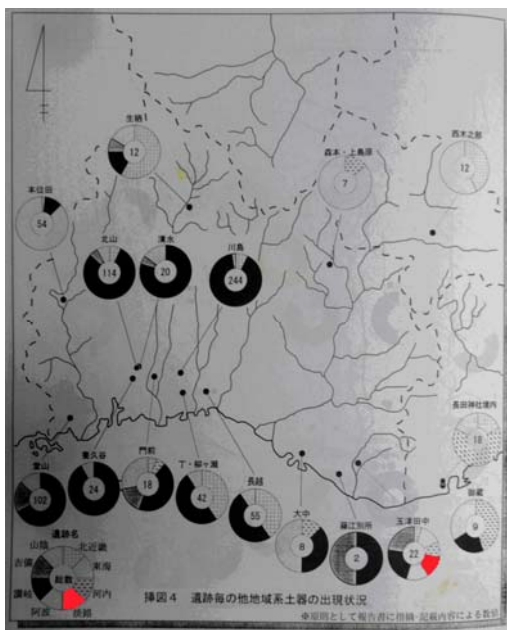


寺沢薫 案 (畿内 大和)

【最新邪馬台国事情(白馬社)による】

実年代	時代	時期	期	近畿編年(寺沢)	北九州編年(柳田)
BC	弥生時代	前期	I	長原式	板付I式
				0	板付II式
				1	
				2	
		中期	II	城ノ越式	1
				0	
				1	2
				2	3
				3	4
				4	5
AD	古墳時代	後期	V	高三浦式	1
				0	2
		前期	VI	下大隈式	3
				1	4
				2	
				3	
		前期	VII	西新式	5
				0	
				1	
				2	
前期	布留式	I	土師器 I a		
		0	II a		
		1	III a		
		2	III a		
前期	II				
		3			
		4			

2. 弥生時代終末期 播磨地域 遺跡毎の他地域系土器の出現状況



「この集落による出現頻度の差は、その集落の持つ固有の交流圏が存在することを物語っており、播磨が一枚岩のような地域圏を形成していないことは確かである。」と岸本氏は述べている。

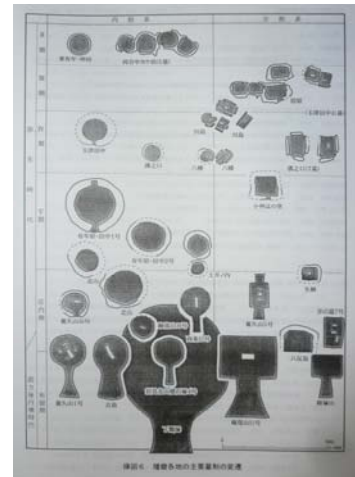
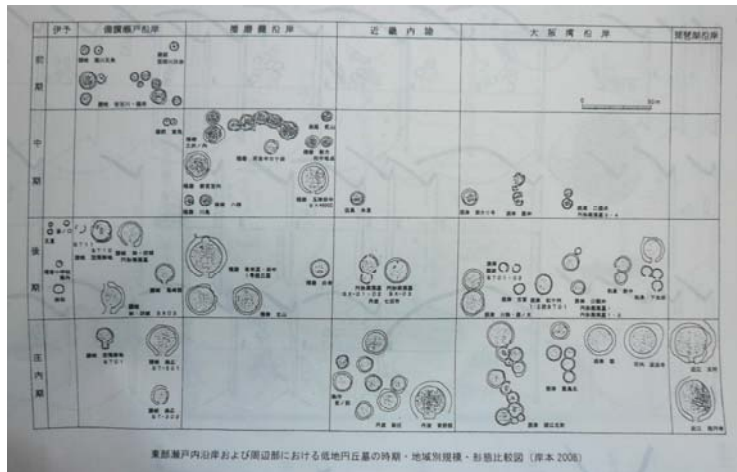
この資料図で淡路の土器が区別されているが、「淡路」系土器が見られるのは摂津*播磨国境に近い玉津田中遺跡のみであり、他には見られない。

また、玉津田中遺跡が淡路を含め、讃岐・吉備・阿波・淡路・河内・東海と数多くの地域の土器がはいついて、この地が交流の結節点であった様相が読み取れる。

集落ごとの他地域系土器の様相

岸本道昭 「播磨の集落と初期古墳」より

3. 弥生時代後半 墓制にみる 東瀬戸内地域 諸国の交流



弥生時代後半 卑弥呼の時代から 古墳時代初期にかけての 東瀬戸内地域 諸国の交流 岸本道昭

4. 播磨風土記に現れる播磨の製鉄関連記事

平凡社 東洋文庫『風土記』吉野裕訳より

● 御方の里【1】

播磨風土記 大国主命はここでは別名の葦原志許男(あしはらしこお)命として登場する。

御方とよぶわけは、葦原志許命は天日槍命と黒土の志爾蒿[しにだけ]にお行きになり、お互いにそれぞれ黒葛(蔓草)を三条足に着けて投げ合いなされた。その時葦原志許命の黒葛は一条は但馬の気多郡、一条は夜夫郡、もう一条はこの村[御方里]に落ちたので三条[みかた]と云う。天日槍命の黒葛は全て但馬の国に落ちた。それで但馬の伊都志[出石]の地を占めておいでになる。

あるいはこうもいっている。大神が形見[形しろ]として御杖をこの村に立てられた。だから御形という

● 御方の里【2】

大内川・小内川・金内川 大きい方の川を大内といい、小さいのを小内と称し、鉄を産するのを金内と称す。

その山にはヒノキ・スギ・黒葛などが生える。大神・熊 が住む

このほか 播磨風土記には天日槍が数多くの里の項に登場する。いずれも鉄と関係深い里である。

【揖保の里 奪谷 伊奈加川 波賀の村 糠岡 の 項など】

● 讃容の里【讃容の郡(佐用郡)の項】

讃容というわけは、大神妹背二柱の神がさきをあらそって国を占められた時、妹玉津日女命が鹿を生け捕って寝ころがし、その腹を割いてその血にひたして稲をまかれた。すると一夜のあいだに苗が生えたので、直ちにそれを取って植えさせた。

ここに大神は勅して「あなたは五月夜に植えなされたのか」と仰せられ、すぐさま他の処に去ってしまわれた。だから五月夜の郡とよぶ。神を費用都比売命と名づける。 現在も讃容町田がある。すなわち鹿を斬りさいた山を鹿庭山とよぶ。山の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した。その鉄を発見した人は別部犬で、その孫らがこれを献上し始めたのである。

● 柏野の里 敷草の村(千草)【央禾の郡(粟粟郡)の項(抜粹)】

草を敷いて神の御座所とした。だから敷草という。この村に山がある。その南方十里ばかりのところに沢がある。広さは二町ばかりある。この沢に菅が生え、笠を作るのに最適である。ヒノキ・スギ・栗・オウレン・黒葛などが生える。

鉄を産する。狼・熊が住む。

● 播磨風土記に記載された石生 石の宝殿の記述

播磨風土記の印南の郡大国の里の条には、以下の話が記載されている。

『原の南に、石の造作物がある。その形は家屋の如くで、長さは二丈、幅は一丈五尺で高さも同様である。

その名号を大石という。言い伝えによると聖徳大王の御代に弓削の大連が作った石であるという。』

石生神社の社伝によると、

神代の昔 大己貴命(大国主命)と少彦名神が出雲国から播磨国に来た際に石の宮殿を造ろうとして一夜のうちに現在の形まで造ったが、途中で播磨の土着の神の反乱が起こり、宮殿造営を止めて反乱を鎮圧した。しかし、夜が明け夜明けとなり此の宮殿を正面に起こすことが出来なかったが、「たとえ此の社が未完成になっても、霊はこの石に籠もり 永遠に国土を鎮めん」と言われたと伝えられ、それ以来此の宮殿を「石の宝殿」、「鎮の石室」と称していると伝えられている。

■ 参考資料 & 引用資料

1. 【和鉄の道 Iron Road】<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/9iron02.pdf>
弥生時代後半 国内最大級の鍛冶の村「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会 Walk
国生み神話の淡路島で、弥生時代後半 卑弥呼の時代の大鍛冶工房村が出土した
2. ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 資料 「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和」
3. シンポ資料『倭国』連合の成立と姫路地域の役割 (2008. 3. 22 兵庫県立考古博物館 姫路埋蔵文化センター)
4. 垣内遺跡 現地説明会資料 「弥生時代後期の鍛冶工房跡」 2009. 1. 25. 淡路市教育委員
5. 播磨風土記
6. 村上恭通著「古代国家成立過程と鉄器生産」(青木書房 2007 年)
7. 村上恭通著「倭人と鉄の考古学」(青木書房 1999 年)

■ 「和鉄の道 Iron Road」 製鉄関連遺跡 探訪 file DOCK より

<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/ironroad.htm>

1. 弥生時代後半 国内最大級の鍛冶の村 国生み神話の淡路島「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会 Walk 2009.1.25.
倭国から初期大和王権誕生へ 日本誕生の謎を解き明かすかも・・・
2. 古代鉄の大王国 播磨国「千種鉄」「岩鍋」 古代製鉄神 金屋子神 降臨伝承の地
2. 播磨国風土記和鉄の道【1】
古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk 西播磨 佐用町 大撫山製鉄遺跡を訪ねて
- 3 播磨国風土記和鉄の道【2】
「御方里」周辺 安積山製鉄遺跡(平安末期の遺跡)探訪 一宮町
4. 播磨国風土記 和鉄の道【3】
産鉄の地「御方里」の里を訪ねて 一宮町
5. 弥生の高地性集落【3】
畿内と播磨の境 明石川・伊川流域 弥生の高地性集落「表山遺跡」とその下に広がる弥生の遺跡群
6. 弥生の高地性集落【4】
弥生の高地性集落に「弥生の戦」・「日本人のルーツ」を探して